

新編  
西洋新書

西洋新書

六編  
上

特3.1  
會社圖書  
室  
一  
四  
冊  
210  
332

本

特31  
671



西洋新書六編序

此書起筆于亞米利加而摸  
 其景况地理也時侯也產  
 物也製造也人情也風俗也  
 無不記無不載而至四編則  
 更轉佛朗士令讀者恍惚跋  
 涉其域為目見而耳聞之思

西洋新書六編序

准官

瓜生政和先生著述

# 西洋新書

六號  
全部

東京書鋪室集堂發兌

特31  
671



准 官

瓜生政和先生著述

# 西洋新書

全部 六號

東京書鋪宝集堂發兌

西洋新書六編序

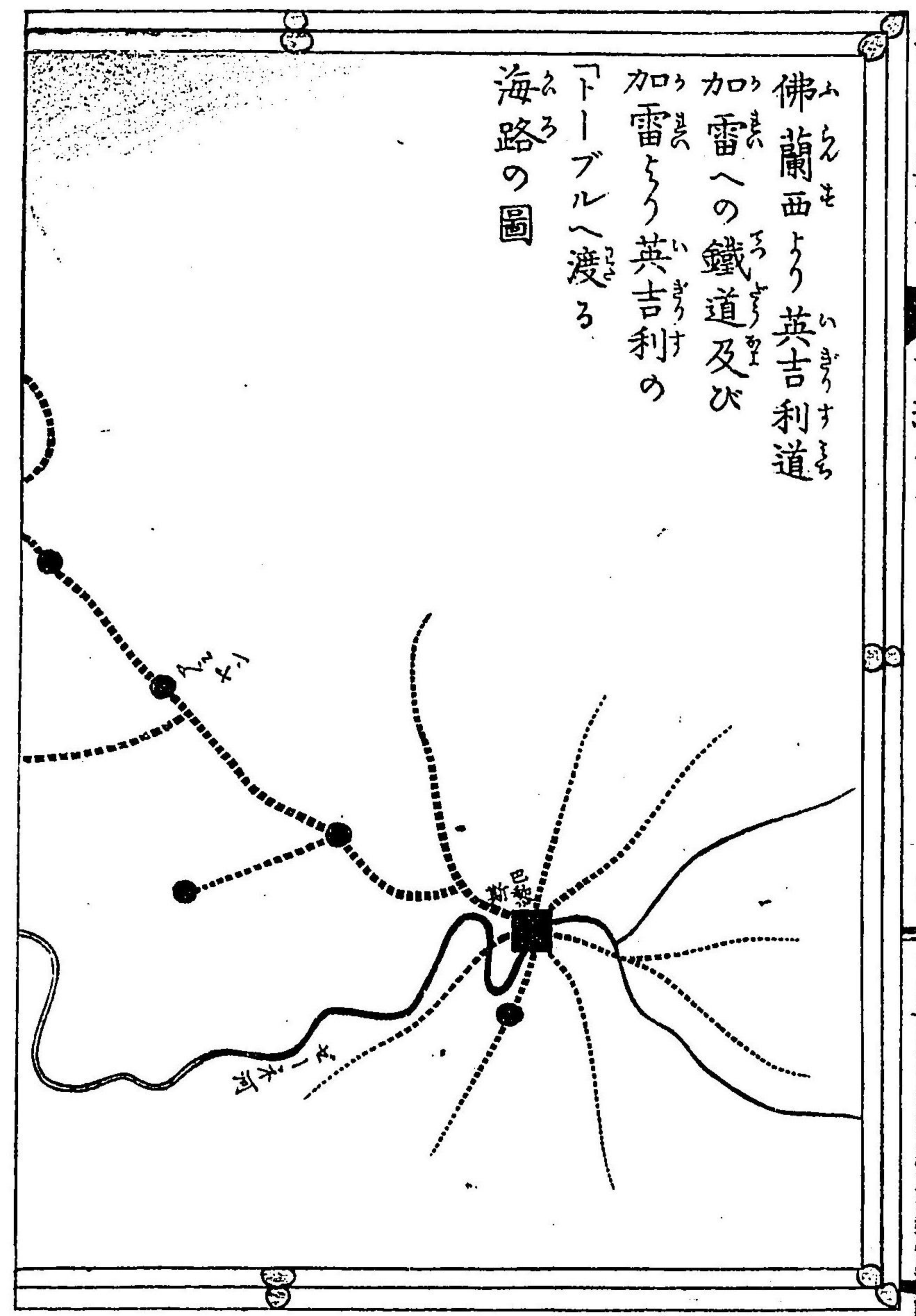
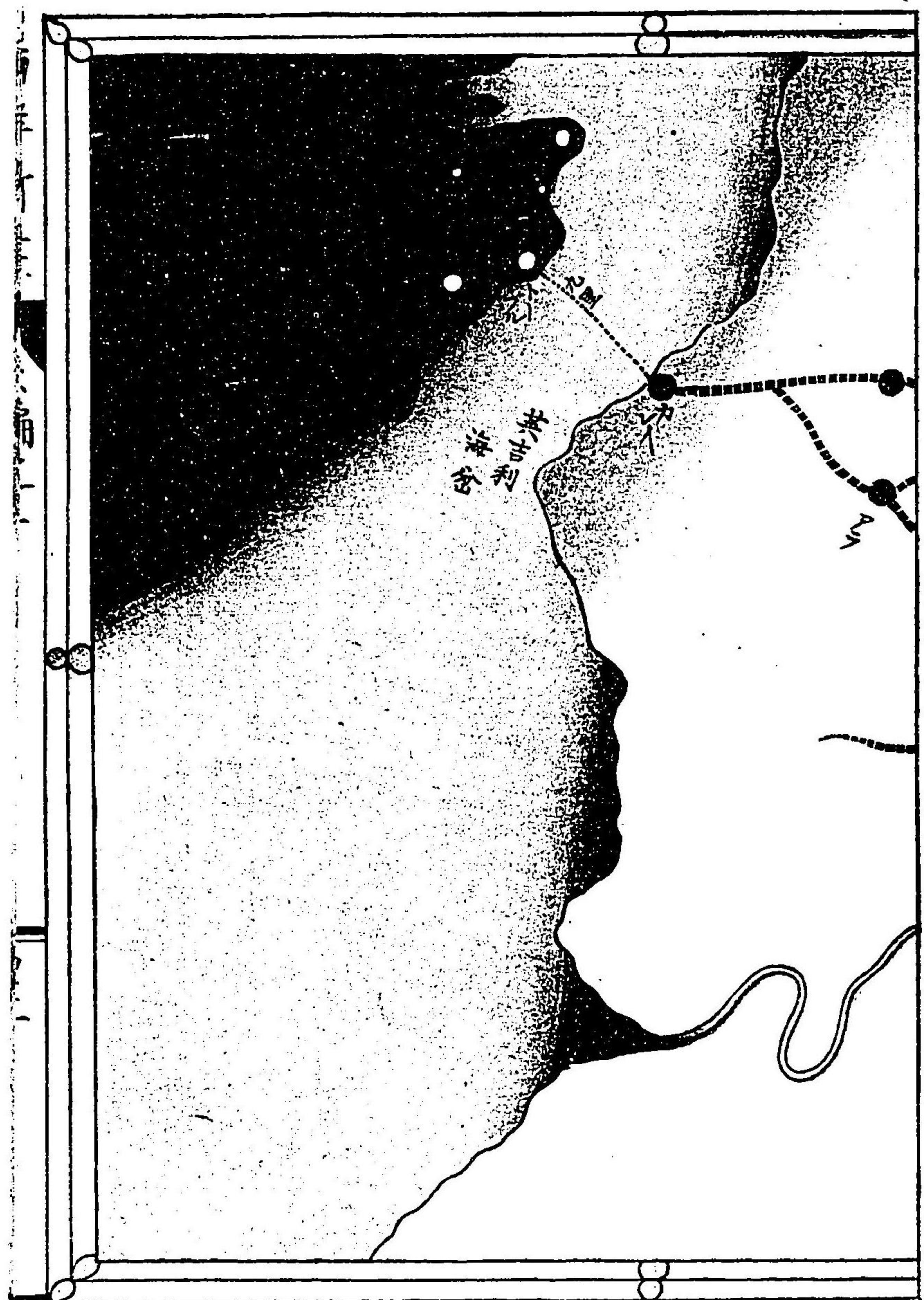
其景况地理也時侯也產  
物也製造也人情也風俗也  
無不記無不載而至四編則  
更轉佛朗士今讀者恍惚跋  
涉其域為目見而耳聞之思

其行文之平易作意之切實  
足亦以彷彿乎其為人也頃  
又六編成復徵余序余閱之  
愈探其難探益盡其難盡筆  
端洩新指間溢竒而其七編  
移英吉利以為益探難探盡  
難盡也夫隨書則隨新蓋是

此書之面目而瓜生氏之本  
色乎可謂不負題字矣明治  
七年甲戌二月識于天籟書  
屋

天籟狂夫





佛蘭西より英吉利道  
 加雷への鐵道及  
 加雷より英吉利の  
 ドーブルへ渡る  
 海路の圖

○上の巻目録

- 巴黎斯籠城手配りの説
- 諸縣より軍用金と贈る説
- 普軍陣營と配る説
- 英王普王へ書と贈る説
- 佛軍氣球と用ゆる説
- 佛將氣球めてツル縣へ往説
- 婦女群と爲る病院の世話と望説
- 巴黎斯困迫の説
- 巴黎斯償金の説
- 外城手始め戦争の説
- 佛人和議と計らんとする説
- 佛將ギリユム勇戦討死の説
- 使鳩の説
- ストラスブー縣落城の説
- 巴黎斯食料の説
- 普王ヴエサイルめて令と出を説

○下の巻目録

- 「ダール縣の普軍令と出を説
- 「メツス縣落城の説
- 佛將「チエール普の本陣へ往説
- 佛軍大いふ手配と定る説
- 激徒巴黎斯を駭を説

- 激徒鎮靜の説
- 普國の間牒と捕ゆる説
- 巴黎斯食糧高價の説
- 巴黎斯人情の説
- 「ネラルプレナウルト討死の説
- 市兵の等級と定る説
- 寫眞鏡の説
- 石炭瓦斯諸色拂底の説
- 「ドロシユ出陣戦争の説
- 「ネラルプレース討死の説

- 普王諸軍を勵ま説
- 佛國人民黨を四派に分つ説
- 佛蘭西大砲の説
- 佛國の醫師シカン又勇氣の説
- 普國出陣の人々へ贈物の説
- 普佛和睦の説
- 佛國大統領を撰擧の説
- 佛國大平小歸る説
- 風船普陣へ落る説
- 普國クリエツプ砲の説
- 普軍巴黎斯と劇射を説
- 拿破崙囚虜の人へ金と贈る説
- 巴黎斯食料盡んとする説
- 普王凱陣の説
- 佛國普國へ土地と償金を出せ説

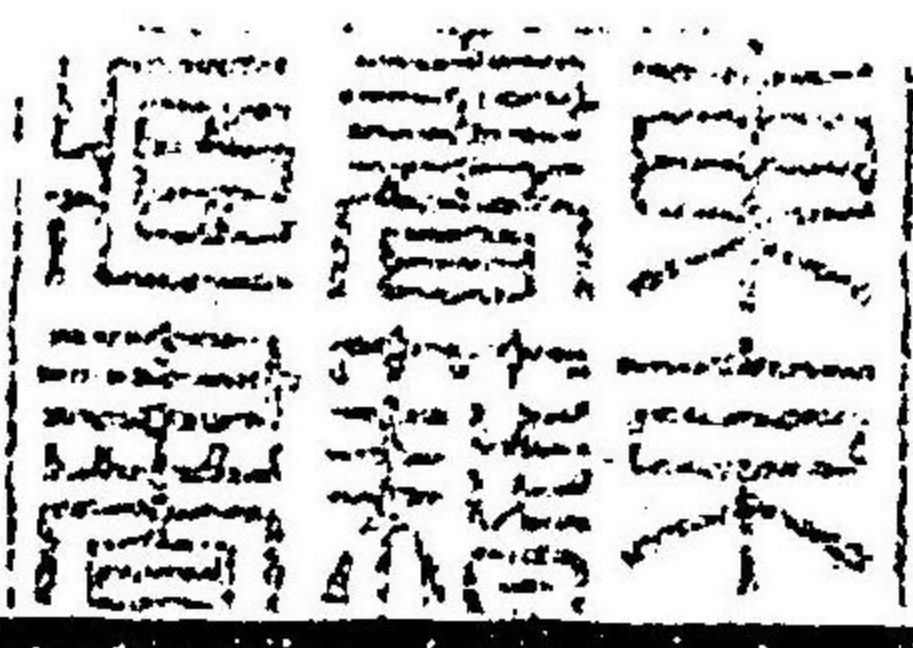
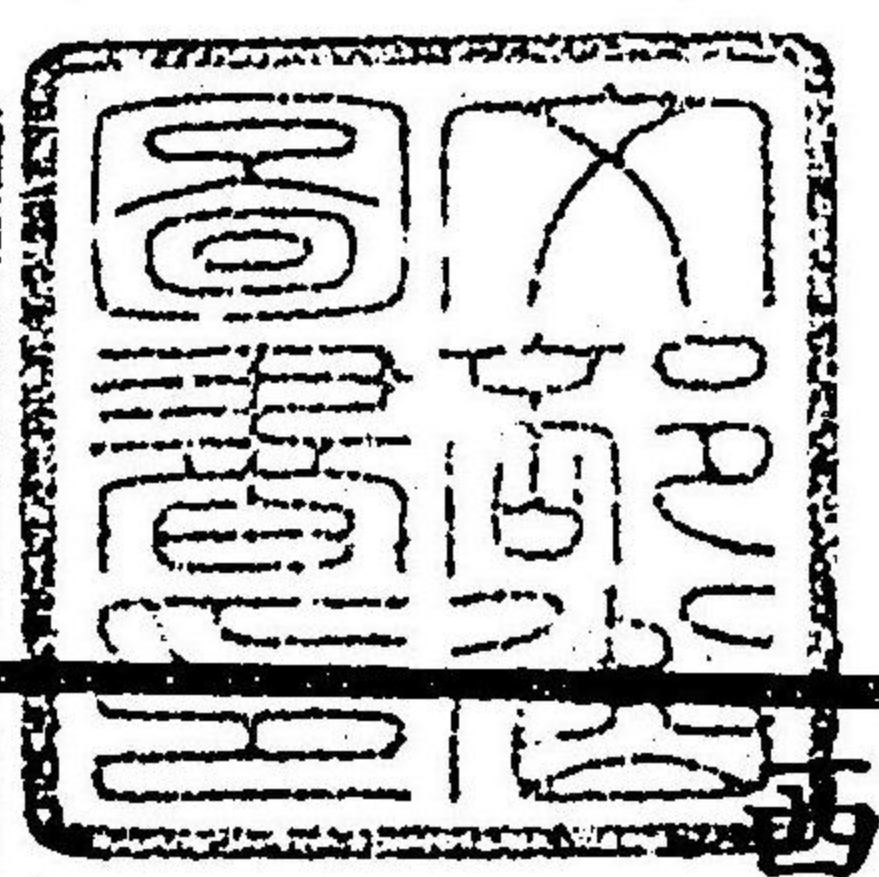
通計

四十六條

西洋新書第六編卷之上

東京

瓜生政和著述



佛蘭西皇帝三世路易拿破崙の英邁なるも年已し開けカ漸く衰ふる及び計策も齟齬ひ千八百七十一年九月四日モントルネン縣落城して普魯士王維廉の爲に囚虜と爲る。普國の軍威も亦く震ひ早既ふ巴黎斯府へ寄せ迫らんとする勢ひあり。その時巴黎斯の諸將の論談決議の上國と共和政度とを以てセネラルドロヒエなる者と奉じて大統領

領と定め副統領「シエル」パール張始り諸全権の大將らより  
 らち寄り日々小軍備と齊ふるといふことを誰一人兵を出さず  
 道路は普軍を迎へ討んと為るものなく只人数を各縣に配  
 り固く城堡を守らざる様主と為し有餘の諸兵隊ハもる巴  
 黎斯府内へ引きあげ既に去る十三日大統領「ドロヒユ」張始  
 り全権の諸大將ら市中へおのれ列と組せよとを巡見為せし  
 後府外の十六城に分配し「ミトラ」ユスの大砲を胸壁上に布  
 きあらへ青白紅の大小旗を巴黎郊外の風は飄へし敵寄せ  
 来らば微塵も為さんと打鉄上り待りたり斯の如くあるは  
 普魯士方の征路に支ゆる敵もたゆま要地とを恣にする奪

ひ取り兵を順序に操り入ると巴黎斯の本城へ攻めかると  
 且夕ふ有らんとを見えろける爰に於て九月十四日ハ巴黎  
 斯府下より府外への出入り朝八時より夕八時までと定め夜  
 中の通行を禁断せしたり折々諸縣の注進をひく烈しく  
 普軍をせよ近郷を乱入し及べり御用心なると成りけ  
 る未だ敵の取り圍まざるうちよとて「チエール」と云へる  
 老練武功の大將とす

「チエール」を巴黎斯府外の十六城を築きたる人々の事ハ  
 四編の始めに記せり

普魯士と和睦を結ぶが為し英吉利魯西亞地地利以太利



の四大強國へ往き彼の政府の議論と問をんと發途為させ  
 且巴黎斯籠城及び諸道の通行尽く塞ると以てツ  
 ル縣へ全國の中央ある故ありて列府とる一國章裁判局  
 全權「グレミウ」と呼ぶ者と大全權と定め政事を出せと  
 ろと為し之後巴黎斯より諸縣へ往く蒸氣車道と殘らば破  
 却し捨させ又全國の人の志氣強引起さんと故王城中の宮  
 殿を言ふもさらふ府下の諸院各館に至るまぐ合同共和公  
 平結交の意を標せし文字と記したる額を掛け同日市中一  
 般へ布告して云ふ  
 一去る九月十日以後に至り公用の外私よく巴黎斯を退き

去りし者のその住居する家の宿賃高し應ト左の償ひ  
 金を取立べきあり

掟則

- 一 六百フラン以上千フラン迄 二十フラン
- 一 千フラン以上二千フラン迄 六十フラン
- 一 二千フラン以上三千五百フラン迄 百二十フラン
- 一 三千五百フラン以上六千フラン迄 百八十フラン
- 一 六千フラン以上一萬フラン迄 二百四十フラン
- 一 一萬フラン以上二萬フラン迄 三百フラン
- 一 二萬フラン以上ハ都て 五百フラン

蓋一ニフランハ我ダハ多クも當る

此償金毎月十日以後十五日まで納むべし

一巴黎斯と退き去りし者の内より病氣まじり温泉場へ

湯治せしむ往し者へその趣旨と書認め指出せし吟味

の者と遣ひし筈と穿鑿を遂たるうへみく所置是れ

のあり

是へ去る十日巴黎斯府内におる市兵隊を取り立たる其

隊中より竊み逃失せ巴グ一身と保たんとて國の危急と願

ざる族多うられ此償金の令と下りたり

蓋一巴黎斯府下借家宿賃の工へ四編上の券よ記した

と見合せを詳うあらん

此日一の蒸気車會社中を千四百人の隊と組と防戦中の火

消人足は備へたり又巴黎斯府下の町屋のりのみを十五歳以

上より十八歳以下の者ら五百人一列の隊と組と筆城防戦の人

數ふ加をうんと希望と出たる小隊り一方の兵士の内小加ふ此

度巴黎斯の筆城精兵十五万市兵民兵合して三十万總計凡四

十五万餘人と録しぬ亦仏國中の諸縣より巴黎斯戦争の軍

用として今日まで運送し来る合カ金の大畧

一イルエピレオン縣より 百五十万フラン

一コラールインヒクタ縣より 五十万フラン

一「ランテ縣より	二百五十万「フラン
一「アンケル縣より	二十万「フラン
一「アンゴレーム縣より	十万「フラン
一「ベサンツン縣より	一万「フラン
一「クレモートヘルラン縣より	十万「フラン
一「コグナ縣より	二十万「フラン
一「リール縣より	百五十万「フラン
一「リオン府より	六万「フラン
一「マルセイール府より	五十万「フラン
一「ナンテ縣より	五十万「フラン

一「ニオン縣より	二十五万「フラン
一「サインナザン縣より	五万「フラン
一「ツール縣より	百五十万「フラン

總計千百〇六万「フランあり

蓋し一フランを我が八分をどふ當る

此日普魯士の先陣をみ巴黎斯府外を押し來り東南の方へ  
 有る「スイルジュイフ城及び「スイトリー城ある兩砲臺の間へ  
 攻め寄せ列を配るよと見えたりしが忽地大砲をうち出し  
 たり仏軍も待ちけたる事ゆる直よ是れ應下砲戦稍ひあ  
 のまふ至りしが普軍暮ふ位んで引上ぬ是れ巴黎斯等城手

普魯士王

維廉の肖像

普魯士王后妃

オーグスタの肖像



始めの第一戦みくく仏軍討死  
十六人普魯軍討死五十八人あり  
いとまん

案下再説普魯士王維廉ハ「セ  
ダン城を落陥れ仏帝拿破崙  
始め四万人の将卒と囚虜と為  
せし後多いたるひ恰も破竹の如  
く向ふ所敵あつれば無人の境と  
押如くめく直小諸軍と進め未  
り千八百七十年九月二十日巴

黎斯府より六里を隔てたる仏王の古宮殿「ウエルサイル」と奪  
ひとり此所本陣と定め太子「フレデリック」維廉ハ「ホント  
プロー本陣と「サキス」候多「ベズン」へ陣營を設け「ゼネ  
ラルハレンテーン」と「シヨアシール」ア「陣所」と為「巴  
黎斯」府外ある十六城を押し取りかゝむ總勢合して六十万  
旌旗郊原に充満し銃砲霜柱のたてろが如くありければ如  
何ある堅城銃塔も保ち難くぞ見えたりける  
然れを「巴黎斯」の市中より諸説紛々となち領地裂き彼  
ふとへ償金祇出いと和睦を乞ふんとするまどの取り沙汰  
専らある故勇氣有る者もまじき怒り政府の官人俄柔

弱ありと罵り猛る声巷ふらふに響々たるをみ及びられ  
市中へ急ふ布告して云ふ

一方今當府内危急切迫の秋あるを巷の流言人と惑はせ  
こと多し假令今和議を講ずると有りとも仏國の領地  
る所寸地といふとも之を強割らば又塞堡の一小石をも  
別とせざるを確呼たる政府の決議よして此一言と変む  
登りしげ

普の大兵をばり巴黎斯の周圍にたらしめたり因り物の價  
忽地平日の三倍に騰り食料と為る乳汁の類ひに至るまで  
早既よ市中に絶えり

乳汁の類ひの斯始めり無あるを府内の富家より多く  
買貯へるの故あり餘の品々皆之に准む

斯の如くあるを仏國大統領「トロシユ」を長く籠城せしことの  
叶ひ難き後思ひ外務全權「ハール」をしく普王維廉の本陣  
み使せしめ解兵の議を計らんと先數日間の休兵と言入  
けりふ普國の元帥「ビスマルク」對へたるや貴國にて休兵  
を請望むふ於るをその國十四世路易王の在位中今と去る  
と二百年前千六百六十七年ふ當り「ラン河」の傍辺あるニケ  
所の郡縣を奪ひとり今日ふ至るまで其國の領地と為せり  
因りて此所を返す論を後ざるべし固より巴黎斯府城と

攻伐も患ひとまゝ所ふ有らざるを不日ふ周圍の一寨城を抜  
き而して後巴黎斯城を討入らん我が兵若し府内へ進入ま  
る時を半へ以て焦土と為まざる豈痛きやあざらんや此  
故に兵を休むるに我が方よ於て最も希ふ所なれば速う  
み和議まざる然れども一ヶ條の望を以て貴方宜しく即答  
有るべし

「メツス縣及び「ストラスブール縣を明償渡ま志し

此縣何を仏國と普國の境上みらり

「モンバンリヤン城を明償渡ま志し

巴黎斯外十六城の内最も堅固廣大なるものあり

言ふ此度の戦争ふつた我が國の損失大いふし其費  
算ふるに違はらざる故に今若し和睦の談判よ及む巨萬の  
償ひ金を受取るふらざるべし獨り全國みざる是を許さ  
ざるあり則條目三ツあり

一 國境の二縣

一 五十億万フランの贖ひ金

一 佛國の總海軍

此償贖を受得られを我が獨り全國の者ら和平為し難しと  
成りければ仏國の使節「ハールも答ふるに辞なく其後巴  
黎斯は立ちり事の由依以て告ぐれを大統領「トロシユ始

り諸全権の人々らも和睦を為すの心絶え全國の人種と尽  
一各縣の市街も焦土と成るまで戦争も及ぶべしと誓  
約する

此時英吉利女王より普魯斯王に贈れる書中云ふ

神明ふ基き人情ふ依りおの一書を陛下に呈す貴國の  
軍令兵威を輝くよと既み爰ふ至り然ととも若惠徳と  
垂く二國の人民の鮮血残りと野の草と染ざらるるんと  
致致せを願く其軍を収め巴黎斯府内ある億兆の生  
民を救ひ多く云

普王是に答へて云ふ

○仏國兵士の  
真像



陛下の高諭實に慈愛と垂  
たり余もまた高諭に従はん  
と神我に問ふおの生民の  
鮮血と野草も灌だく快き  
や否やと然ととも神ま  
此後鮮血を一滴も流さ  
からむとの禁めも無し今  
二國の講和成ると成らざ  
るとい巴黎斯はわりの我  
みあはる固より生民の塗

炭ふ苦しむ余が欲せざる所なれを勉めく傷害あるに  
り鮮血を灌ぐありを偏ふ巴黎斯人民をく苦惱無ら  
あめんと欲するあり云云

斯の如くあれバ和睦の談判あるにみるに巴黎斯外城の周圍  
ふ於て合戦日々ふ止とたるに然れども未だ激烈なる大戦  
争あり及をざりて普魯士王第一の公子フレデリッキ。維  
廉の勇氣壯んの若大将を空しく日數と経るに彼手鈍  
く思ひ一ト當手強く當て試んと我が攻口の隊列を先鋒  
より操出し九月廿九日の朝五時より巴黎斯の一大岩を  
る「ビルシユイフ」の砲臺を攻かり數百門の大砲を城壁を

のまを押し進め築き上たる鑊石も微塵ふなれと打出たり  
「ビルシユイフ」城へ仏將「ゼネラル」ピノアールある者固め  
るが是と見く直ち兵を操り出し勢ひ猛なる普軍の  
中へ自身真先より進み撃入り瞬く間ふ乱戦とあり追  
つ返して挑みあひたり此時仏の一將「ゼネラル」キリエ  
ムを砲臺の胸壁上より敵の模様を篤と見済し我が隊  
下の兵を率ひ他の戦争の目を懸き虚空をきりて飛ちが  
ふ大砲小銃の彈丸の中と真一文字ふ走せ通り敵の陣營へ  
討入りつ普軍めり築きたる對ひ臺場を無二無三み伐や  
り忽地あを乘取りく一息つたなる有様の天晴無双と見



えたりなり此時遙後陣の方み指揮を居たる普國の大將  
 フレデリック維廉の味方の苦戦を打驚き三万餘人の新  
 手を率ひ自身先鋒を兼り援ひ来るその勢ひ激浪の風を山  
 為ま如くそれを衆寡敵一がた敵計り佛將「ゼネラル  
 ビノアー」ハ急命令し引揚げの喇叭吹きたる諸軍勢を  
 纏めんとす時普國の新手の兵追まらつて附入りみ為ん  
 とせしむ佛將「ゼネラル」ギリユムハ遙後陣を引下り自  
 身衆軍を殿し屡敵兵を伐むびり勢ひますます猛あり  
 が雨の如く飛来る弾丸「ギリユム」が全身を徹けつて  
 終よその場を命と終り嗚呼おの人や仏蘭西の軍將中よて

勇猛の聞え高かりし將國の衰へんと為る災害も柱礎  
 及び斯とバ佛國の損亡幾箇なる故と嘆息の眉を皺め  
 惜まぬ者ハ無りしとぞ

その後四日を経て「ギリユム」が討死せし遺骸を「インワリ  
 デー」の地み於て最懇切に葬りたり

是の頃の大戦も両軍とも手柄を握る者少なかりしと  
 死傷も最多かりたり

斯て後モ尚朝と多く夕となく小糺合ひの炮戦絶えぬと言へ  
 ども激烈ある戦ひの及をさるるものなり追々日と終るの久  
 したより巴黎の市中差支ると多き強以て此日書翰贈

答の布令残出せり

一 籠城中仏國諸郡縣および他の國々へ遣はるべき書翰ハ  
時々輕氣球残以て送り達まべきあり

一 輕氣球も送り達まる書翰ハ其重さ一匁〇七厘二毛よ  
り越やぶるべし

蓋し書翰一通小付一匁六分の價錢を拂ふべし

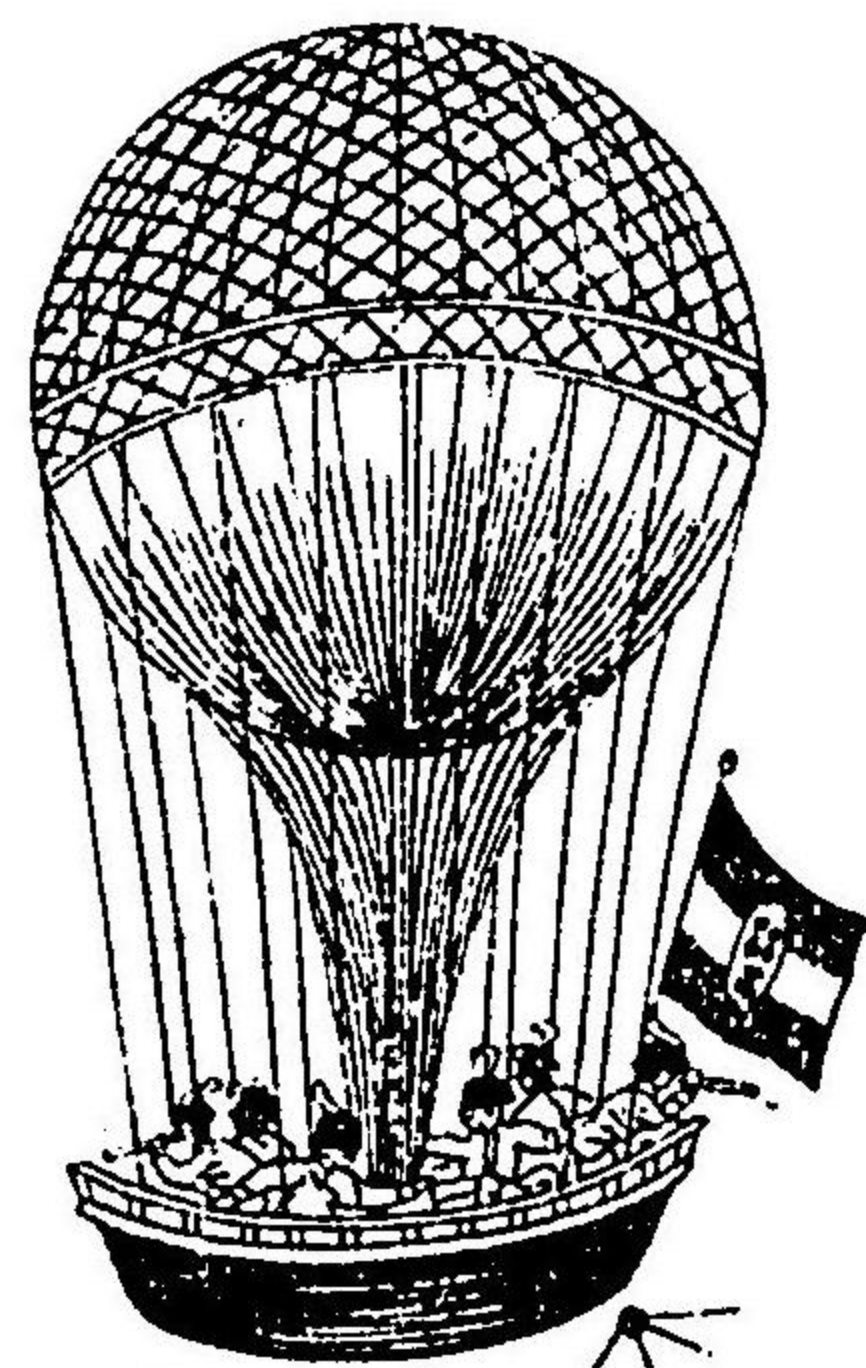
九月四日書翰残送達なきんが為め巴黎斯の市中にて第一  
号の風船と上たるふ普魯士の陣營よりもまゝ一ツの輕氣球  
残上たるも巴黎斯府内を窺んとし上りぬの暗み時刻  
の合しなるか或ひは似の輕氣球残追んとするの為るうと巴

黎斯市中評し合り

輕氣球の夏ハ二編上の卷華盛頓府の條下小説なれを見  
合せく詳みるん

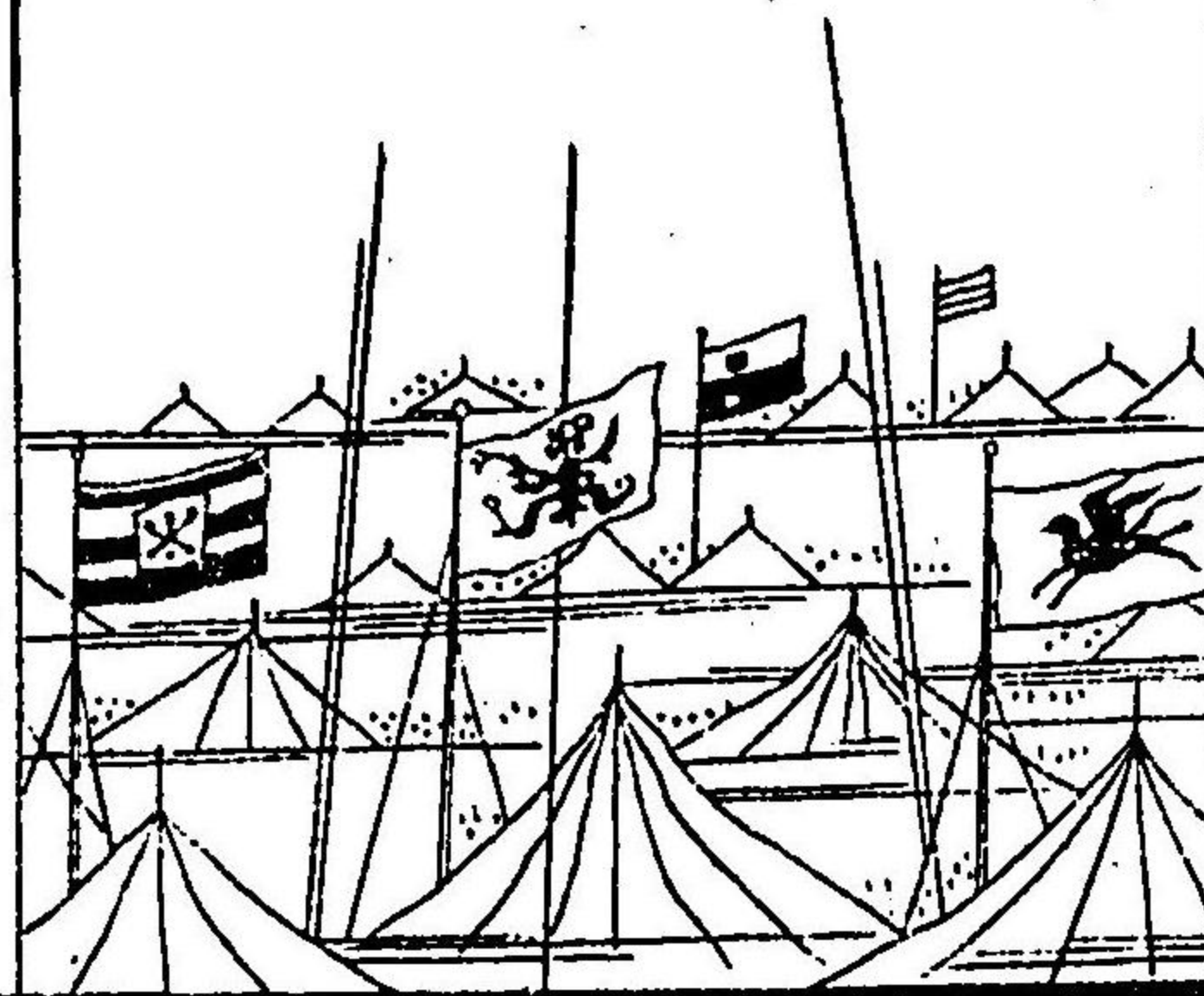
七日朝巴黎斯府内の「モンマルトウ」と名けし街より内務  
全權「ガンベタ」以下二人の官負と使鳩六羽と携へ一の輕  
氣球小駕し空中小乗り上げ別府「ツール」縣に往ん  
南の方へ向ひ風のカみ任せく走らせし輕氣球稍普魯士  
方の陣營を配布ありたる正中に至りしは忽焉として風  
止むれば氣球も中天小止まり空氣の中小漂へり  
ンベタも虚空もろろの所は在りて普魯士六十万の大兵が市

在山野小充滿一要地に拠りたる本陣分営大隊の旗は大き  
く小隊の旗は小さく運動の兵士蟻の如く小連あり肩小取



。仏將「カンベタ  
気球」

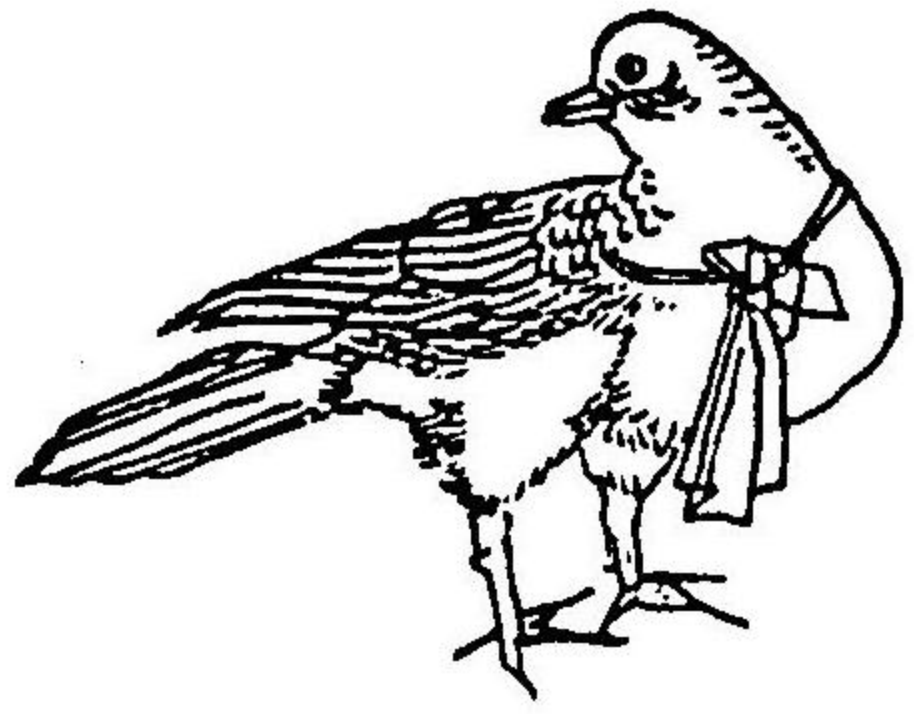
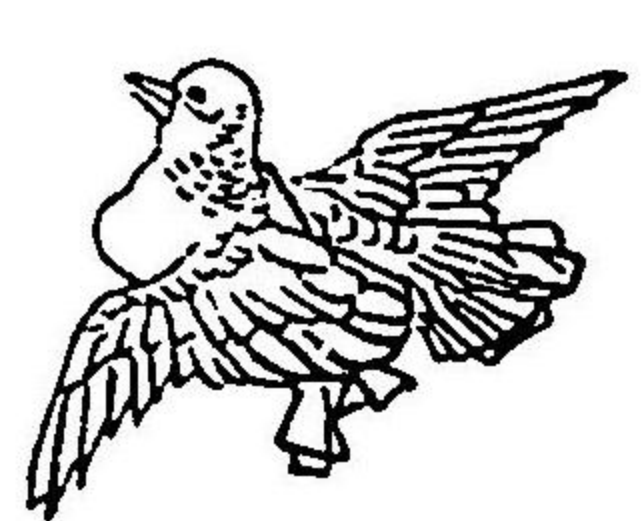
普軍と見下す



たる小銃針より小やう小光るまど一目の下み見下し若  
此所は大砲を備へ設くる手段あり普魯士の軍士六十万

ハ忽地微塵小為まきまきの紙など彼の両官負と共に諸方  
指さし窺ひ謀慮小餘念なき折から普の陣中みく是を見つ  
け「カンベタ」が乗り「気球」を的と取り大砲及び無数の小銃  
をうちかけたり時ふ一つの弾丸仏將「カンベタ」が鬚の毛と  
拂つて上りなれを気球を操つる官人驚き恐と気船の中み  
積り貯へ置し砂紙盛りたる袋紙取て投捨なれば気球忽ち  
突昇り中空をるりみ至りたる故只砲声を聞のこみく弾丸  
やうやく届くを成りたり  
気球紙上るるの砂を盛りたる袋を幾つとも無く積込  
置き銚りと為まあり然れともあや軽くして気球高く昇

り過るべ袋の中の氣を抜き、勢ひ弱く、鏝り重過て  
 氣球底さふ有るとなる積貯へ、砂の袋と投捨を目方  
 軽くある故氣球高く昇るあり球の中の氣を抜きと砂の袋  
 を投ると水を乗る船の楫の如く砂は袋の事ハ前記  
 せ、風船の條下漏れたれば爰に贅、其欠と補ふ  
 佛將ガンベタの乗り、氣球を虎口を逃せやうやくふ、と  
 敵陣遠きところふ至り地上ふ下、これバ携え来り、使鳩  
 を、無きふ地上へ下り、と云ふ一書を持、巴黎斯の  
 方へ向ける故遣り、ガンベタ始め二人の官負ハ、ツール縣  
 さして急ぎける



○使鳩へ  
 手紙を  
 括し図

使鳩と云ふる鳩の翼の下或は頸の元、書状を括りつけ  
 て是を放ち、其使ひ成爲さしむるあり、此鳩を平常よく飼  
 馴らし置けるもの、不有  
 ざれば役ふ當が、假  
 令バ巴黎斯の王宮ふ飼  
 かける鳩朝ふ飛出て遠  
 く府外の野辺ふ至り食  
 張求るも夕アふ及べな

巴黎斯の王宮ふ戻り来るあり故ふ巴黎斯への使鳩遣  
 ふ、巴黎斯不栖を為し居る鳩を持出て放ち飛さば数

里の外の所と云へども鳩も中天ふ舞ひ上り其目あつて後  
求め得る忽地巴黎斯へ戻るあり爰を以て鳩も其間合ふ  
気球を用ひて鳩と遣ひて其役ふ當りといふ

八日の夕景ふ至り前日佛將「ガンベタ」の放せし使鳩巴黎斯  
の桶ふ戻り来り翼の中ふ書状ありて「ガンベタ」以下  
無事小地上へ下りて後知りたり再説内務全権「ガンベタ」  
る気球より下りて後急ぎツール縣ふ至り仏國の諸縣へ一  
書と布告たり其文の大畧

今我が佛國の狀態實ふ危急存亡の期ふして宇内の万邦  
へ向ひ非常の舉動を示す時あり然るも二百万の生民を

養へる巴黎斯府を小敵兵の為ふ圍する我が全國の人  
々家と身と忘れ國の為ふ戦闘する意無ければ援兵  
繼らざるふ因り防禦頗る弊へ敵兵一回あつて攻めば府  
内の者一朝ふ瓦解し一夕ふ分裂せし果して然らば破  
と近きふ在らむと然る後幸ふ我が府城内ふ四十万の  
市兵ありて皆一致し必死を究めて防戦せしこと實ふ感嘆  
為まなきあり嗚呼佛國の生民よ國家の興廢と國威の存  
亡も只今日ふあり國土の威名と保つとも惟汝衆人保ち得  
ざるも亦汝衆人我が億兆の衆人一回怒りて憤激尽力を  
す時へ豈國威の恢復せざることあらむ務めりや

巴黎斯府城外より普軍六十万の大兵を以てその周圍をか  
 ぎりめぐり今ふ暮々として戦争なく朝夕只ちと々の矢軍の  
 多しと日を送り強て戦えんと為る景勢なく陣々の守り強  
 固め自若と遠久の体を示せしむる故を以て猶巴黎斯城と  
 普魯士領の境まで佛蘭西勢の籠城ありて戦争盛んあり  
 ところ七縣あり因りて基本たる巴黎斯と圍と置き巴黎斯  
 らその應援を絶ち而して其の七縣の城を連々ふちと入と  
 七縣盡く我が有となりて後其總勢と合して巴黎斯を迫り  
 せしむる四方と堅固ふかしく限り知れたる城中の糧尽るを  
 俟て戦えむとて仙軍の屈伏せんと必定ありとの普の謀將

一ビスロルクが計策なり又巴黎斯の城中ありて大統領「ドロ  
 シユ」を以て諸の守兵ら全く死地を陥りぬぐる空しく因  
 循ふ日と費し敵を拂ふ手段なく徒に食糧の乏しく成り往  
 後日小懸ざるが如き一竊ふ待ところの物ニツある故あり其  
 一ツも前の日歐洲の強國と呼ぶたる英吉利魯西亞地  
 以太利の四政府へ往り「チエール」の歸り来ると又一ツも屢  
 戦隊と出よきとて布告せし故に佛蘭西全國の諸縣も普  
 く民兵を募り敵の後背より襲ひ懸ると有んり其期と俟る  
 城中より兵を出し差狭んで其を攻を普兵前後に敵を受  
 り戦ひ度を失えん時一舉りて伐破り我が國內に足と止

させとの廟算あり然れども府内の總人負二百万あり  
 見定めあき事な當ふ一籠城久しき後終く食糧終ふ竭き  
 老幼街に倒れ婦女子途に叫ぶの日ゆくを恐らく人民激  
 動し意外の内乱を醸成すト大統領をトめ諸將の因循  
 なるを訝り怪し眉を皺むる者も有りとまん  
 佛國の勇將「ゼネラル」エリツクある者が楯籠る「スト  
 ラスプール」縣の城を防禦嚴重にして策畧も多かりけ  
 ど「バ」寄手をもく敗走し勢ひ最も強大あり「グ」外に援  
 けの味方なく籠城せよ五十餘日経糧食ひ尽く「弾  
 薬」も乏しく如何ふとも詮方なく終に城門を開く降

参し將卒とも囚虜と成り大砲諸器械皆そのまゝ小普軍  
 の掌中へ陥り九月三十日の夜ありたり  
 十月四日の早天に婦人老若を云は諸方の市街より集まり  
 来り百五十人乃至二百人を一羣とみ皆病院の旗章を挿  
 たぐ巴黎斯の政事堂ある「ホテル」ドビル館へ参り訴へ出さ  
 云ふ病院の諸用かゝり傷人の介抱ふ此節より多くの男子  
 を附置とんの甚どき費へたりと一故みよの男子とを  
 防戦の兵士とみ願ひく我徒を以て病者或ひは傷人の  
 給仕と為し給つるべしと成りこれを政府の諸官負らこれ  
 を感し其乞とらみ任せたり



婦女隊と為して  
病院の世話  
せんことと云ふ

又あの節諸方預見まらる巡  
邏の兵隊中ふ三五人の婦人  
うち雜りて歩行りたる兵隊  
と齊した衣服と着し腰より袴  
の如きもの衣纏ひ金屬より小  
さな樽の形体の器をこしらへ  
革の紐あき肩より脇の下へ  
下げたり是を「カンチユエール  
と云ふ陣中の兵士酒をよび  
焼酎の類を賣りあふるる者

みく此「カンチユエール」出る者ハ「ゼネラル」以下武官の  
娘まの兵卒の妻子のこまり蓋し肩より掛し樽の如き物の中  
小酒焼酎を貯へたり

あの頃食糧の肉あひく拂底ふり市中の貧民殊の外難美  
まらるり聞えけとバ政府みく布告と出

一此節府内食糧の獸肉乏しく成し由み付今より日々牛  
五百足羊四千匹と屠り巴黎斯府内の人民食糧の  
為み配當るまきまあり

牛羊とモ肉目方二百六十八匁ニ付 定價 三百七十文

諸方へ通路を断て後を巴黎斯府内の市中食



糧の品乏しきハ勿論とり人ども就中乳汁乾酪酥油の類ハ  
 絶く無くまゝ魚類鳥類の如きも無し然るところ今日政  
 府めく賣渡せ牛五百匹羊四千匹以て總体の食糧小宛る  
 小府内二百万の人口小割り配を一日小牛一匹羊八匹  
 四千人の食と為るや名足る人きあらば因りて近頃まゝ馬  
 の肉後屠り牛羊馬の三肉後賣るとり人ども人あや肉も乏  
 しこれに是を捌く家々の門前の終日群集混雜しく買んと  
 する者豊富なり斯の如くあらば食糧の諸品日を追て高く  
 殆常の日の四倍小昇り貧民大の小困究まる故路の傍ら小  
 日夜小した店を開き些少の品物を並べ置き價へを論ぜど

賣拂へり然まゝ今日小至りまゝ富なる者も食糧の品の  
 外漫り小無用の器具まゝの求めざる以て其利小因り家  
 族多きものも猶さら口を糊まら小足らざるハ困迫ますく  
 究まらる

我朝明治年間徳川氏瓦解のまゝ小菘と其の家人ら一時  
 活計の道を失ひ家の入り口或ひは道路の傍小小やうな  
 店を開き所持の器物種々の物品後持出し是を賣りて  
 口服養ふの助けと為せしが巴黎斯府内もまゝ小斯の  
 如く四千七百里餘の波濤を隔てて小蘭西国の首都と云  
 へども其做まらる一ツ小一と變り無き其見らるべき

あり

市中の有さる既ハ斯の体あるを貧民救ひとし其処此処  
 へ假りみ食を為せ家と設けたり是を「カンチニエーナンヨ  
 ナール」と云ふ此どころろふ少の肉類と美と依備へ置き  
 爰ハ来りて食を為さんと思ふものハ銘々み麵包と携え持ち  
 只肉類ウ汁ウと乞ひ得る食一往より一汁一肉ともみ代價  
 三百文とせ麵包ハ此時とりんとせ價あや貴くらげまゝ三  
 百文の錢を設らる老人子供の仕度みも當市中めてハ今  
 ふたりや容易きと故富家の人々言ひ合せ施行の心得め  
 此食會社を建しとあり

再說普魯士王維廉ハ巴黎斯より道法六里外隔てたる「ウ  
 エルサイル縣を奪ひとり 仏王の古宮殿よ本陣を居えよ  
 里」後其手の大將「ゼネラルブリュマンター」と云ふ  
 者ハ命ト縣内の市中み普く令を出さしめく布告さする  
 やう

一方今戦争中當「ウエルサイル縣市中みて

貸家持の主人

貸部屋持の主人

金銀の貸主

其他諸職人等

右の者共ハ月々一百フラン以上五百フラン以下の租稅  
 を普軍の總督へ相納むべし

一 普軍滯陣中の諸兵士の食糧及び何ふ限らざりて入用の品ハ遲疑なく速うみ差出まじ

一 兵士止宿の爲み家居入用の節ハ何時も明渡まじ

一 兵士滯留中日夜とも出入の節ハ其都度々々差支ざる様開閉致まじあり

右の條々違背ふ及ぶ者ハ直ち軍法を以て死刑ふ處せらるべき者あり

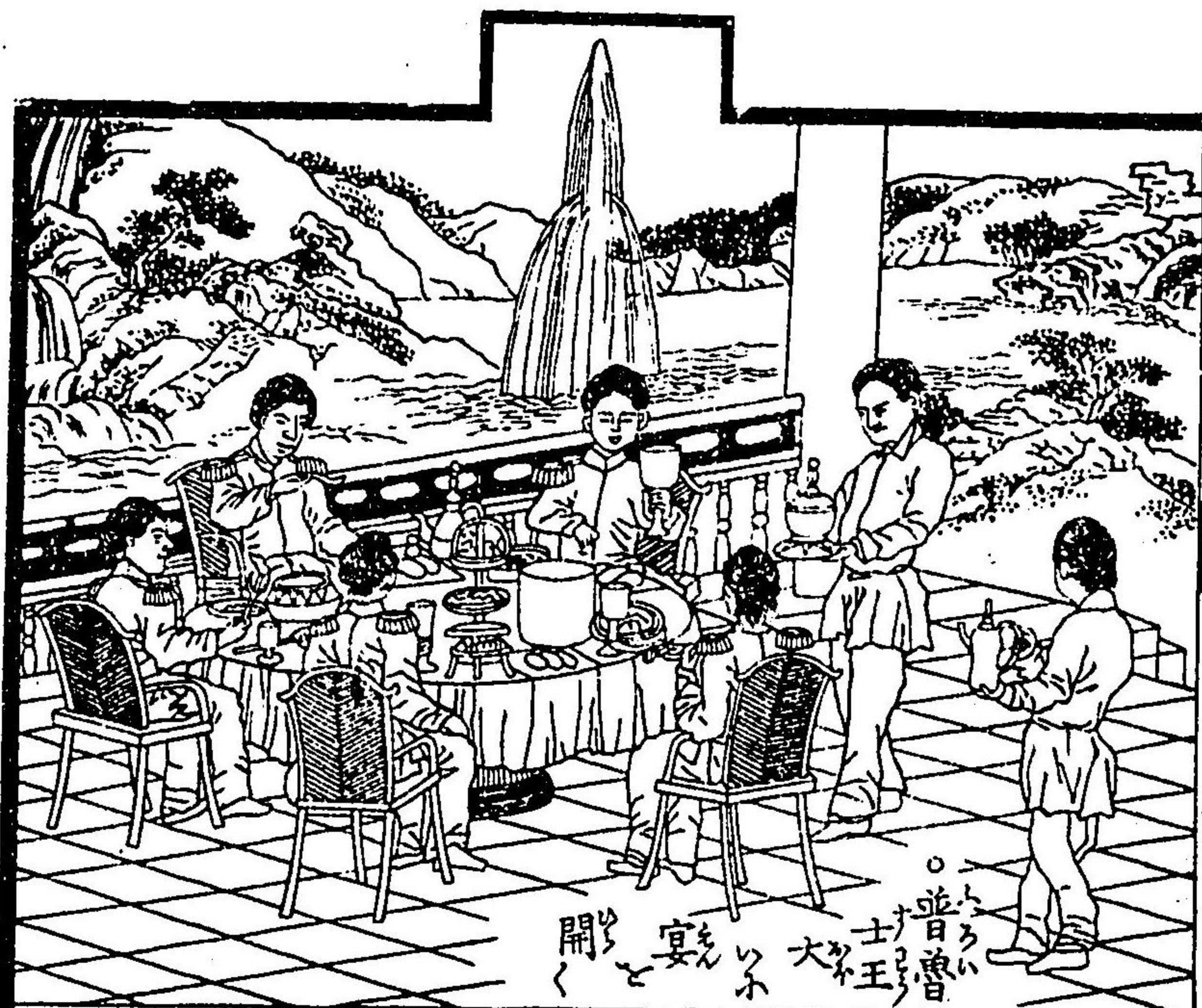
一方今戦争中とのごとく當縣の者の内他處へ移住つて度輩ハ速うみ退去と差免まじ然れども巴黎斯の方へ向ひ往と紙禁む蓋しシヤルレソト縣への道路

を明置べ此地ふ向ひて立退登し若令を犯し巴黎斯路の方へ遁去る者あらば一言の問答なく直ち弾丸を以て討果まじ

一 當市中の者ども毎夜毎小家へ歸り宿せざる時直ち其家居と取り上ぐべし又大小限らざる物及び兵器と携え歩行と堅く禁断たるべきあり

此の如き嚴酷ある令を書認め市中の所々張出しこれ人民大いみ驚き恐と其苦惱言ふべしお抑當「ウエルサイル縣ハ始めより防禦の兵士有らざる故以て是は抗抵ま

さざれば普軍進入し来るの日より威を張り權と恣まみ



普魯士王の大宴開

あつ勢ひ示すと斯の如く  
 然とバ普魯士王維廉ハ太子  
 フレデリツキ維廉元帥トス  
 マルクラを始めとて諸手の  
 諸大將を「ウエルサイルの宮  
 殿」招き集め彼の「仙国第一  
 と稱せらるる池水中の噴泉」を  
 走らせ  
 「ウエルサイル噴泉の」とい  
 四編上の巻み出せり

大い酒宴を設け音楽と奏し暫時軍中の鬱を慰め一  
 同飲ひ致盡しぬ實ハ戦國の常と言ふ者々市中ハ苛酷ハ  
 苦しと宮殿を歡樂を極めたり  
 又「タル縣」へむせ向ひたる普の大將「アルヘル」候々「仙軍」  
 降を乞ひ城郭全ク我が掌中小落陥り後暫時是ハ在留  
 セーグ程るく「巴黎」の攻口みえせ向ひ縣内より「普國」の四  
 公候ら残り市街の家々ハ在留あり居り布告し云ふ當  
 縣ハ住ふ者々普の軍士一人ハ付日々麵包一斤半酒二々陶器を  
 差出せしと普兵夜毎ハ供する所の酒を飲み酔開み至とバ  
 或ひは謡ひ或ひは踊り宛然祝ひ日ハ逢るグ如く然れども

乱暴狼籍ふ及ぶ事ハ堅く禁断ま一只縣中ふ貯へり  
 一五穀の類ハ牛羊の如きものハ悉く奪ひ上させたり  
 普軍の勢ハ斯廣大ありけしを當時仙軍の囚虜とありて普  
 魯士の首府伯灵ふ押込めら居るもの痴人強除き士官三  
 千五百七十七人兵卒十二万三千七百七百人合せると十二万七千  
 二百七十七人あり

十月九日魯西亞國の后妃より普國の手負人へ療治の用め  
 備ふべき品物強許多見舞と一々伯灵府の病院へ贈り来と  
 まり魯國と普國とら當時近き所縁あり強以ての故あり  
 再説巴黎斯の外郭めくる普佛の兩軍日々ふ戦ひと接ゆ

らとらども今み花々した勝負ありとバ巴黎斯市中の者  
 らまる紛々と議論強起一大統領をトめ諸大將らハ僉腰グ  
 抜けたるうると言詈り其手鈍き強誹謗まら族多けしを  
 政府の百官ら先必死の一戦強為まんき体と示さんと陣  
 所とと始め巴黎斯の市街へ布告して云ふ

「巴黎斯郭外より諸道防徳の總裁を「ゼネラル。ピ  
 ノアー及び「ゼネラル。ジュクローの二將ふ任一  
 ブリーの寨より「ゼーブルの寨まを「ゼネラル。ピ  
 ノアー是類掌より「ゼーブルの寨より「サンウーアン  
 の寨まを「ゼネラル。ジュクローまを強指揮る

セシ

此日巴黎斯より少一離きて仏帝避暑のため設けたる「サ  
 ンクール」と名けし一城あり清涼閑雅の造宮たる要害も又  
 堅固なる故普軍是れ據り陣營と為しこれに佛軍砲臺上  
 より焼丸發打込しそのの宮殿を須臾の間も焦土とす  
 て棄たり

當夜より巴黎斯市中の兩側み設けたる瓦斯燈および家々  
 めく點まるところの瓦斯燈を半減し且家々も點ま瓦斯  
 燈を十時半と限り成く消させなればさうも明瞭美景の市  
 街も爰もろりやく朦朧たり

此程巴黎斯府内の諸會社より摺出せる新聞日誌總く二十  
 七種あり故小日々夜々の出板紙數を多しければ是を見  
 る者ハ昼夜眼を休むる暇なし

我朝慶應より明治の始め東京市中より摺出せる新聞  
 聞既二十板小至りし野刃與刃越後その外所々も戰  
 争ありし後以て親子兄弟一族との安否と知らんが為  
 ん是を見んことを欲する者四方も多く在るが故あり然る  
 小巴黎斯も今斯の如く前記せし路傍の道具や又あの  
 新聞の多き其様自づと髣髴たり

巴黎斯籠城の久したるに至り政府も蓄へ置きたる獸肉も

まゝ之く成りなれば十月二十日より其家内の人別ご  
 け切手と渡しその切手と携え肉類を商賣ふ家小往きを買  
 求むる支とるたり蓋し一月一人分の肉の目方二十七匁  
 ふしと三日分づ賣渡さば則と為を然るふ是を買んと為  
 る者曉二字の頃より日暮るまで獸肉小社の門前を群集し  
 混雜大方あり給を市兵隊三五人づあみ出張りて先後の  
 順序を世話するあり籠城の始り牛四万頭羊三十万頭と蓄  
 りて二ヶ月の食量と充るを足る積りありしが今  
 既ふ一ヶ月強過たれども籠城の期知さかしく而して貯藏  
 の肉も既ふ半と尽し別ふ塩漬の肉も僅くある故獸



肉賣捌きの法かく嚴重に成  
 りたり然も馬の肉も未  
 だ制限さうざれば買入る  
 と自在と言ふのりう價  
 ふ至るく牛肉と異なること  
 一世の中饑饉をれを町に喰  
 物見世多きが如く巴黎斯の  
 市街も料理茶屋常より殖  
 て一町の間より二三軒有り  
 當せり皆入り口の戸も此度

西洋新書

二七四

政府の命ふよりて食料の肉目方の定めありて御一人  
人ふ付料理の肉類一鉢の外を差上申さば候と書たる札  
張出たり

この頃出せし新聞日誌の内より今般巴黎斯府の籠城久し  
きふ就ての貯藏の獣肉おひく乏し然れども府内  
に在る馬の數平日ハ八万頭あり今戦争ふつき騎兵およ  
び砲兵の馬あはれ是を合せ十万疋ふ登る一疋の馬の  
目方と六十七貫二十五匁とされば此十疋の馬の肉  
と其高二百五十万貫ふなるあり府内の人負凡二百万而  
し一人の食糧一日ふ六十七匁と配當して尚五十日

支給する不足るまゝ婦女小兒のおもはれ食得ざるもの  
を除けを大約二ヶ月の食肉をその馬より不足あると  
みしと出せり

却説仏國在軍の總督「マレシヤルハセー」は  
「レシヤル官三人」「ゼネラル官五十人」「コロネル」  
八月十四日此所ふ籠もり其時「ハセー」に屬する者「マ  
レシヤル官三人」「ゼネラル官五十人」「コロネル」  
その以下の官人六千人歩卒十三万人合して十三万六千  
五十四人あり抑「メッス」縣の城郭もや「仏蘭西諸郡縣」  
中みく最要害堅固あるものあれば「巴黎斯府」より東の方獨



逸國の境上まで小於る第一等の位ふを「ストラスブル  
 縣城の要害」ともいふ次ぐ「メツスの如きハ巴黎斯府城」も只  
 一等の城築の如く堅固ある所以に  
 その往昔より普国を始り獨逸列國の者の侵へ来らん  
 深く懸念し怖る故とぞ然る今仏帝拿破崙ハ  
 「ウエルジユム縣」も退くとすども是も換はるる仏國陸軍の  
 諸總督も老練武功の聞え高き「マレシヤルバセー」  
 十三万餘の兵を率ひまの堅城も楯あつてバ普軍も猥る  
 兵を進り深く「巴黎斯」とかき難故に「セダン」落城し  
 仏帝囚虜とあり後普魯士王の二公子「フレテリツキ

シヤル」と総大将とす二十万の大兵と残り「メツスの  
 城壘」を取りかともせ後背と易くし後あひく「巴黎斯」へ攻  
 かりたる佛將「マレシヤルバセー」ハ八月十四日「メ  
 ツス縣」の城中入りより「セダン」縣城の「マレシヤル」マ  
 クマオンと「鹿角」の勢ひ張り城郭を離れ普軍を迎へ激  
 戦し是を破りしと數回み及べり八月十六日普の大軍と  
 「クラエロツト」の地も戦ひ十八日「レゾニヒル」及び「サンクリ  
 ロー」の地も戦ひ三十一日および九月一日も「サンハル」へ  
 及び「カンリエツヒ」の地も戦ひあつて三戦ハ何れも大激戦  
 みし普魯士方討死すおひ合せ七万人余仏蘭西方討死

手負合せ三万七千人余と云ふ殊ふ八月三十一日九月一日の合戦より「バセー」の軍威大り震ひ普國の戦隊は仏領の境ひの外も追出まへる一と人数不足の故に以て「マレシヤル」マクマオン城頻り迎へるの手の兵と合体し敵を討んと謀り「マクマオン」も我が陣隊の兵足らざるを以て「バセー」と合併まさんと為たると普軍急ふ「セダ」の城に押寄せ来り「マクマオン」早く取込めらるなり「バセー」の計策の齟齬「ハセダン」落城の前の夏あり然るに「バセー」の思ひあとの成らざるのま「セダン」落城し「バセー」破命とす將卒悉く囚虜と成りたるよしと聞とい

へども「バセー」自若とし動ぜず其翌日小至り「巴黎」の政事堂にて衆議の國人國を共和政度と改めたるよし注進し来りたるを「バセー」も喜びもせず嘆どもせず諸大將をぞあり市中さらふ平穩あり殊ふあの時を縣内兵糧不足にわらむ價も平日の一倍ふ登りしのみ只牛ハまを不の類ひる未だ差支えらるる故縣内勇氣さう小撓ま各戦術を尽し敵を破らんとを思ひ乃る然るふ九月七日小至り「メッス」縣外の周圍あり「セダン」「シヤンゼアン」など言る地へ普の二公子「フレデツキシヤル」十万の兵と率し

急きうふ押寄おしよせ来きりたれば「バセーン」も四万の兵へいを操さく出して午ご  
 後ご二字にふたのあろより合戦くわせんをトまり砲護ひょうごりのとを激烈げきれつありし  
 終つひみ雌雄しゆうを決けつせむ暮くれふ及およんで物別ものわかれと成なりたり此時このとき普  
 軍ぐんの死傷しやう一千餘人佛軍ふつぐんの死傷しやう八百餘人ふ及およぶ其日そのひまを夜  
 ふ入り城將じやう「バセーン」竊ひそみ兵へいを押出おしだし「モセル」の地ちに陣  
 どり居ゐたる普軍ふぐんへ急きうみ夜討よたうをカケ大おほい敵營てきえいを憐あはれりし是  
 を破やりし普の援軍えんぐん早く四方しやうより起おこりふらむに激戦げきせん敷時  
 間かんふ至いたり普兵ふへい六百ろく人軍ぐん二千五百人死傷しやう一明方あきかたふかよんで  
 「バセーン」も「メツス」城じやうへぞ引上ひきあげたる斯かくりたれば普軍ふぐんの  
 倍ま嚴重じゆうじやうふ「メツス」縣けんの周圍めいぐうを取りもた昼夜ちゆうやを分わかりて攻撃こうげき

「バセーン」も兵へいを出だして戦闘せんとう日々ふかよびたり普国  
 の二公子にこうし「フレデリツキ」シヤル、の兵へいを操さくつるのいとを  
 巧たくみ兵へいをとり人ひとども「バセーン」も能たく防禦ぼうごましむべく  
 普軍ふぐんと悩なやまやり然しかども巴黎パリ斯府城しふじやう敵てきに圍くわまれ援兵えんへい未まる  
 と無なし日數ひかずを経へるふ從したがひ弾藥だんやく兵糧へいりやう乏ちかしく成なり往むかき籠  
 城じやうまをふ五十日いそひふ及およびしころも縣中けんちゆうの糧りやうとまるとの絶たえ  
 たるゆゑ犬猫鼠池溝いぬねむねのいほふ放はなせし魚籠うお籠の中なかに飼かひたる鳥とりまで食た  
 食くひ尽つくし果はに闘戦軍陣とうせんぐんじんに用もちゆる馬うまを人ひと殺ころし日々ひびの食料しきりやう  
 不充あされば騎兵隊きへいたい及び大砲隊たいひやうたいもふ至いたりて乗のるべき馬うま  
 なく引ひまき馬うまをければ精兵せいへいあり利器りきありと雖いも是これを用もち



十月二十七日はひみ礮臺胸  
 壁の上へ降参の白旗を出し  
 城將「マレシヤル」バセー  
 コロネル官一人を將て普軍  
 同術計つた是を成りし  
 備へも無ありたる故將卒一  
 ざると數日彈藥も一発の  
 十日を経るふ及び食尽る喰  
 ど猶よく防戦しと籠城や七  
 ゆる夏能く成りたり然と

の總督「フレデリツキ」シヤル、ガ陣門へ降りける故同世  
 八日の早天ふ普將「フレデリツキ」シヤル、も旗下の將卒  
 と引卒して「メツス」縣内へ進み入り仏將「バセー」ンガ軍隊の  
 將卒を引とり悉く是を囚虜と成せり時ふ仏兵十三万余人  
 小く愈もく餓疲れたる色見えたり亦大礮四百門奇礮  
 一百門を今捕し是を出さず猶城中に残りたる諸大將の乗馬  
 なく引あんと為さず餓勞を只の一步も引と能はば是も  
 因りて普軍らも仏將「バセー」ンガ今日の降参ハ實に餘義あ  
 きまと思へり此時普の二公子「フレデリツキ」シヤル、ガ兵ハ  
 七軍隊ふして總勢二十二万成りけるが内二万人を「メツス」城の

守兵として残り二十万の兵を督一シヤル、ハ直ちハ巴黎斯の攻撃をさんと西をさしてぞ進まらる

メツス縣籠城を八月十七日ハ始まり十月二十九日ハ開城を一籠城を七十七日此間の手負かよび陣中病気の

兵或ひる病院に於て死せしものも八月十九日より十月二十九日までハ四千人ハ八十四人ありと云ふマレシヤル。バセーン時ハ歳六十三

巴黎斯外郭よりよく戦争多しとりくども著る一き支無く過ぎ十月二十八日の夕景ハ至り市中何となく騒々として

人氣穏らありざりしが翌二十九日ハ及びメツス縣落城の

説とや紛々と立とれども未と確乎ある報を得しありぬハ斯

置々たるハメツスの城壘堅固ありてバセーン是ハ將とる

り普軍の後背ハ和えられハ深くハの軍隊を待しハ思ひ

居たる故あり爰を以て外務全權シユル。ハールブルを信偽と

探らんと氣球ハ乘り巴黎斯府内ハ出たる後へ去る八月十

五日ハ英吉利會西亞地地利以太利の四大強國へ講和の板

軍の本營たる一ウエルサイル縣一泊一今廿九日巴黎斯の城内小戻りたる後以てメツス縣落城の次第と委細小物語りける故大統領をトメ諸大將らも少く望み後失ひたきと棄置くべきまふ有らねば早速メツス落城のありむき後市中へ布告ありける故府内の人民是を見て氣と折りカと挫きたり

日誌小云ふ此度チエル氏の巴黎斯小戻りたる佛国小於く最も要用とする大事件と擧きしと明瞭なまば普軍小て道と開き通まよるメスマルク氏も後拒むべし然とともメツス落城の凶変と早く府内小知らせ城兵の志氣

と挫くんと思ふが為小容易く軍中の通行と許せしとんと記したる

十月十日小千五百門の大砲鑄立を命となりし小二十五日まて小二百五十門出来し廿八日小まて二百門出来しりしが十一月十日まて小千五百門成り成るまてり其速あると見るべし

十一月三十一日の未明より巴黎斯の街々めく呼出りの太鼓と鑼々と打鳴まし頻りたれば何事やらんと思ふらち午前十時のころ小至り市兵尽く集合し隊と組と列と立て勢ひ潮の湧ぐごとく小政事堂ある「オテルドヒル館小向ひ押往

き四方の道路を取りまゝに騷擾大方ありは抑まの騷立の  
 基本たるや今般籠城中政府の件々互にうござる有るを  
 今迄の官負を廢しあらざる之を撰挙あると謀り政府へ  
 迫り来りしものみち數万の市兵置々たる市街総督急ぎ  
 たち出で群中ふ説き論し鎮んとまれども混乱して言語通  
 ざぶコロセポール官アラゴ官二人必死ふ制まれども聞お益  
 激動し竟ふオテルドビル館の門を打ちき五百人ほど  
 押お進んで階上へ登り大統領ドロシエ衆ふ説くと  
 立出ふ群黨と行合ひられを其所ふ止まり言を演んとする  
 小衆口置々として通せば頻りふ制し漸く少く鎮りまれを



市兵  
 ドロシエ  
 迫る

「ドロシエ衆に向ひて願くま一  
 兵士の言ふと聞け  
 一兵士と我を卑下せし辞  
 あり  
 余が赤心他念なく國の為  
 一命を抛ち巴黎斯府を守護  
 するの必き疑がみと勿れ初め  
 余巴黎斯防禦の命を受け入  
 城せしと府内守護の設けな  
 く兵も置け無し其折りあり

西洋新書 六編之七

三三

らく二日二夜ふく落城まじりと然るふ赤心を尽し防禦の術と施せを以て今日ふ至り請見よかく勝誇りたる強敵あれども未だ一人城内不足を以ての蝕はざるは余輩日夜心強焦し思ひを苦しむるを偏に敵を掃攘する不在り各らも宜しく防禦小心強んじんと諭しの言辞も終らざらば後方より激動し来る勢ひ拒ぐ登りしげ然ととも政府を倒さんと云なる官負と退くべき為あり知らざらば暴動する者頗る多しあの時諸官負も政事堂に馳つけ来り必死と鎮撫を計りし後巨魁五十余人を階上の上へ問答一二言ふ及び一時に數十人の市兵銃とたがさ

え政事堂に昇り来りし時官負はセクレツケルと云ふ者大音あり汝らと合衆共和の同僚に列りまがし斯乱暴に及ぶも他へ對して耻辱ありまやと云ひければ市兵大に怒りセクレツケル強押せし声々此這奴も潰せ踏はぶせと呼せり理非に關係せざるが如くあるは恐れ近き傍りの家居ありし門戸を鎖し店を閉たり此日雨降り泥路ある故往來雜選なるは中何者やらん空中に向ひて発炮四度及びこれば衆人いよく動揺し老幼女子に至るも怪我を多し為なる者もありあの企ての巨魁たる者へ「ヒエー及び「デレー」クラスの兩人ふく彼らが官負選挙の書



小市中の者四人の名を記し中一人は大統領と為るべしと  
 の言ふに群黨の多く政事堂を充滿しドロシアを罵りて云  
 ふ速くも館内を去れ人今汝を殺さんといふとドロシア答  
 ふ余もあまも兵士あを敢て恐るべしと云ふ神色自若より群黨  
 ら諸官貞を取らんと悉く押込めたる中ふビガルドと云ふ  
 者名く館内を抜けりて電信機を以て諸軍將を呼ぶトけ  
 るに數大隊の兵士馳来り政事堂を警衛し直ちふ入りて捕へ  
 られたる諸官貞と助け出しぬまのより大統領ドロシアを  
 我が家へ帰るも益と兵士の衣服を着し兵士を雜りて退き  
 たり然して曉三時大統領ドロシア數隊の兵士と率ひて

政事堂へ入りその館を奪ひかくし群黨の爲に押あられ  
 る諸官貞と出して舊職を復したり實に群黨の蜂起せしむ  
 城外に迫るる普軍を防ぐより最難くその内乱若普軍へ洩  
 るる言ふは城内の危き壘卵の如くあるべし豈恐るべ  
 かうざらんや因りて市中へ布令なり政府の改革と企望ま  
 る者多きも就るも固きを共和政度たるを以て来る三日府  
 内二十街の中より夫々出頭公會のより入札を以て決と取  
 るべきあり云々と張出し先その人心の動搖あるを鎮たり  
 今日仏將「チエール再び普軍の本陣「ウエルサイル縣へ往  
 たり是彼の英吉利魯西亞地利以太利の諸宰相と同所ふ

参會一衆議の上普仏二國の兵と解き和睦と裁断あさせんが為あり

前ふ「チエール英普埃」以の四ヶ國ふ使せしとん彼の各政府の議論を問ひ普仏の和睦と四ヶ國の公裁ふ托せん  
と欲したれども四ヶ國の政府何をも手と拱き黙々として辞を下し難きの勢ひありしと云ん

西洋新書六編之上終

